



映画&トーク

北京五輪に翻弄されて… 娘が語る、亡命チベット人家族の14年



2022年2月、北京五輪が開催されます。

その14年前の2008年。ひとりのチベット人が、北京五輪について、チベット人の率直な思いを映像にまとめ、発表し逮捕されました。

彼の名は、ドゥンドゥップ・ワンチェン。

政治犯として6年の獄中生活を経て2017年に米国に奇跡的に亡命を成功させました。



映画の上映と、家族の長女で米国に暮らすダドゥンをオンラインでつなぎ、

14年前からこれまでのこと、北京五輪2022への思いなどを語ってまいります。

北京五輪の影で、中国の少数民族がどんな思いを抱いているのか——。
ぜひ、お越しください。

1月22日(土) 13:30~16:30

(13:15開場)

東京ウィメンズプラザ・ホール

東京都渋谷区神宮前5-53-67

スケジュール

13:30 『恐怖を乗り越えて』上映

14:00 『ラモツォの亡命ノート』上映

15:40 長女のダドゥン&小川真利枝
(『ラモツォの亡命ノート』監督)トーク

家族が米国で再会した秘蔵映像もご紹介!



参加費: 1000円

(Peatixにて事前申し込み800円)

<https://peatix.com/event/3108009>

問い合わせ

family_of_tibetan_asylees@googlegroups.com

新型コロナウイルス関連でキャンセルになる場合がございます。
詳細はPeatixにてご確認ください(事前申し込みできません)。

主催:「チベットの映画上映&トーク」実行委員会

共催: 明治大学現代中国研究所、アムネスティ・インターナショナル日本 中国チーム



『恐怖を乗り越えて』（2008年・25分・日本語字幕）

監督 Dhondup Wangchen ドウンドウupp・ワンチェン



1974年、チベット人が多く暮らす青海省化隆回族自治県の農家に生まれる。北京五輪を控えた2007年よりチベット人100人以上に「五輪をどう思うか?」「チベットに自由はあるか?」などインタビューした映像を撮影し、ヨーロッパの映画関係者の協力を得て映画『恐怖を乗り越えて』を発表。08年3月に不当に拘束され、国家分裂を扇動した罪で逮捕される。

アムネスティ・インターナショナルやヒューマン・ライツ・ウォッチなど世界中の人権団体によって彼の釈放運動が広がり、12年に獄中にいながらにして「国際報道自由賞」が贈られた。

14年、刑期を終え釈放されたものの、中国当局の監視が続き自宅軟禁状態になる。17年、亡命に成功し、米国で生活する家族と10年ぶりに再会。現在は米国で暮らし、講演生活を続ける。



『ラモツォの亡命ノート』（2017年・93分・日本語字幕）

監督 小川真利枝



主人公のラモツォはチベット人。夫ドウンドウuppが政治犯として逮捕され、突然、故郷へ帰れなくなった。最初の亡命先は、インドのダラムサラ。そこで彼女は、道端でパンを売りながら、4人の子どもと義父母を女手ひとつで養った。学校へ行ったことがないラモツォが、人知れず続けていたのがビデオカメラに日記をつけること。その映像には歴史に翻弄されながらも、前を向いて生きるひとりの女性の姿がうつっていた。映画は、ラモツォがスイスを経てサンフランシスコに辿り着くまでの6年を、80時間におよぶビデオ日記とともに描いた。

【トークゲスト：ダドゥン・ワンモ】（オンライン登壇）

1992年チベット自治区生まれ。ドウンドウuppとラモツォの4人の子どもの3番目・長女。

幼いときに、両親と連れられふるさとチベットからヒマラヤを越えてインドのダラムサラに亡命。

その後、両親と離れチベット難民の子どものための寄宿舎「チベット子ども村(TCM)」で生活する。2017年、きょうだい4人とインドから米国へ渡り、母と生活を始める。家族のなかで母を支え、息け者の兄を叱り、頼れる存在。現在、アルバイトをしながら米国の専門学校に通う。



「故郷」は消えない。苦境の中でも筆を執る妻と娘。人々のいる限り、安田菜津紀さん（イラストレーター）

■関連書籍■ 第8回「山本美香記念国際ジャーナリスト賞」受賞
『パンと牢獄—チベット政治犯ドウンドウuppと妻の亡命ノート』
小川真利枝著（集英社クリエイティブ）

2009年にインドのダラムサラで妻ラモツォと出会った監督・小川真利枝が、8年の歳月をかけて制作したドキュメンタリー映画『ラモツォの亡命ノート』（2017年劇場公開）。その後のアメリカでの一家再会、ドウンドウuppの獄中生活と亡命に関する独白取材を含む、ラモツォと家族10年の軌跡が綴られたノンフィクション。

